ジェルジ・ルカーチ
『歴史と階級意識』「ローザ・ルクセンブルク三部作」評註
――《自然発生性と意識性》の転回＝移動

西角　純志

第1節　問題の所在

第二インターナショナル期の社会主義運動が、その後のヨーロッパにおける社会民主主義の諸政党を作りだした。第二インターナショナル期の社会主義運動の革命家たち、例えば、カール・カウツキー、エドァルト・ベルンシュタイン、ルドルフ・ヒルファデング、ローザ・ルクセンブルク、ウラジーミル・イリイッチ・レーニンなどにとって、社会民主主義の理論的な課題は独占資本主義や、金融資本主義の生成過程とその構造と運動、および帝国主義の解明であり、また、資本主義諸国と非資本主義諸国とが構成する世界市場に基づく世界経済の解明であった。これらの課題のなかで最も重要なテーマは、資本主義の崩壊と社会主義の必然性というテーマであった。1898年から1903年までにドイツ社会民主党のなかで行われた修正主義論争の中心テーマは、まさに、それであった[(1)]。

修正主義論争は、ベルンシュタインが19世紀末に当時のドイツ社会民主党の理論機関誌『ノイエ・ツァイト』（*Neue Zeit*）に「社会主義の諸前提」と題する論文を1896年から1898年にかけて10回にわたって連載したことに始まる。そして、ベルンシュタインの一連の論文にいち早く反応したのが、ローザ・ルクセンブルクであった。ローザは、ベルンシュタインの連続論文「社会主義の諸前提」に対して、批判の論文を『ライプツィガー・フォルクスツァイトンク（ライプツィヒ民衆新聞）』（*Lepziger Volkszeitung*）誌に1898年9月21日から28日まで7回連載した。さらに彼女の批判に応えたベルンシュタインの著作『社会主義の諸前提と社会民主党の任務』（1899）に対しても、ローザはベルンシュタイン批判の論文を1899年4月4日から8日まで同誌『ライプツィガー・フォルクスツァイトンク（ライプツィヒ民衆新聞）』に5回連載して反論した。これらの論文は、4月末にパンフレット『社会改良か革命か』（1899）として刊行された。この著作は修正主義者シッペルに対する批判論文「民兵制と軍国主義」を付録につけたものである。ローザの修正主義批判の特徴は、経済理論においては資本主義の「適応能力論」を批判し、社会主義の歴史的な必然性を主張することであり、革命論においては社会改良主義を批判し、労働者階級の政治権力奪取による社会主義革命を主張することであった。ローザは、カウツキーの資本主義崩壊論を擁護するとともに社会主義革命のための政治的実践を強調した。

他方で、カウツキーによる修正主義に対する批判は、『ノイエ・ツァイト』誌上の諸論文をはじめ、『ベルンシュタインと社会民主党綱領』（1899）で遂行されている。前者の諸論文では、

ベルンシュタインの価値論、唯物論的歴史観、弁証法などに対する批判についてその都度反論したものである。また、後者の著作は、ベルンシュタインの『社会主義の諸前提と社会民主党の任務』におけるマルクス批判に、体系的に反論したものであり、前者の諸論文を集大成したものである。ベルンシュタインが、歴史の発展を規定する要因として経済法則のみならず、法・政治制度的要因やイデオロギー的要因を重視し、多元的な見方をとり、社会主義を資本主義崩壊の結果として実現する社会体制とは考えず、実現されるべき倫理的要請として捉えたのに対し、カウツキーは唯物論的歴史観の経済決定論的な解釈に立ち、社会主義の不可避性を主張した。カウツキーが、マルクス主義とエアフルト綱領の厳守を抽象的に唱えるだけで、ベルンシュタインの問題提起には踏み込まなかったが、ローザは、ベルンシュタインが問題提起した資本制的社会構成体の構造的な変化と、それに伴う世界情勢の変化に注目していた。カウツキーのベルンシュタイン批判がエアフルト綱領の解釈の仕方に限界づけられているのに対し、ローザのベルンシュタイン批判の根底には、変化しつつあった資本制的社会構成体と世界情勢に対する認識があった。すなわち、ローザとカウツキーとは、世界認識、世界認識の方法論 、政治論が異なるのである。ローザの主著『資本蓄積論』(1913)は、こうした修正主義論争のなかから生まれた作品である。ローザの資本主義崩壊論は、『社会改良か革命か』におけるベルンシュタイン批判のモチーフであり、ドイツ社会民主党左派が依拠した理論であった。『社会改良か革命か』が資本主義の無政府性から恐慌と崩壊を説くという論調が基調をなしていたのに対し、『資本蓄積論』は、マルクスの資本蓄積論を批判して、資本制的生産の資本蓄積が非資本制的生産関係を解体しつつ進行し、その極限において全世界が資本主義化することによって、かえって資本蓄積そのものが不可能になるという理由から資本主義崩壊の必然性を主張するという論調が基調になっている。『社会改良か革命か』では帝国主義の形成の必然性を含む帝国主義の認識と資本主義の崩壊の論証を主要なテーマにしているが、力点は崩壊論の擁護にあり、帝国主義論は後の課題となった。そして資本主義の崩壊の論証のテーマは『資本蓄積論』に受け継がれていくことになる。このようにローザは、資本主義の崩壊と社会主義は「不可避」(zwangesläufig)であると捉えていたのである。そして、ローザのこの提起を正面から受けとめたのが『歴史と階級意識』におけるジェルジ・ルカーチに他ならない。

『歴史と階級意識』(1923)は、八本の論文から編成されている。そのなかでも「ローザ・ルクセンブルク三部作」といわれているのが、コミュニストインターナショナル・東南ヨーロッパ支部の機関誌『コムニスムス』(*Kommunismus*)に掲載された『歴史と階級意識』の第二論文「マルクス主義者としてのローザ・ルクセンブルク」(1921年1月)、そしてドイツ共産党の理論機関誌『インターナツィオナーレ』(*Internationale*)に3回に亘って掲載された第七論文「ローザ・ルクセンブルクの『ロシア革命批判』についての批判的考察」(1922年2月)、それに亡命先ウィーン・シュタインホーフで執筆された第八論文「組織問題の方法論」(1922年9月)である。このうち、「組織問題の方法論」は1921年の中部ドイツにおける統一ドイツ共産党による「3月行動」直後に『インターナツィオナーレ』に掲載された「革命的イニシアティヴの組織的諸問題」を基にして書き改められたものである[(2)]。ルカーチが、ローザ・ルクセンブルクの問題を詳細に取り扱わなければならなかったのは、「ロシア以外の、ことにドイツの革命的マルク

ス主義者の大部分が有効な結論を引き出している場合でも、誤っている場合でも、彼らに対して、ローザ・ルクセンブルクの考え方が、彼らの理論を規定していた」からであり、「真に共産主義的・革命的マルクス主義者の立場にたつには、どうしてもローザ・ルクセンブルクの生涯をかけた理論的業績と批判的に対決しなければならなかった」からである[3]。そして、ローザと対決するには「レーニンの諸著作と演説が方法上、きわめて重要な意味をもっている」と、ルカーチは付言する。それはレーニンの理論的活動の基礎をなしていたのは「レーニンがマルクス主義の実践的本質を従来にはみられないほど明確にし具体化したということ、すなわち、この契機をばこれまで完全に忘れ去られていた状態から救いだし、この理論的活動によってマルクス主義的方法の正しい理解への鍵をふたたびわれわれの手に与える」からである[4]。ルカーチの「ローザ・ルクセンブルク三部作」は、ローザの『資本蓄積論』、「ロシア革命論」草稿のみならず、『社会改良か革命か』、『大衆ストライキ、党および労働組合』、「ロシア社会民主党の組織問題」などを考察の対象にしている[5]。この三部作は、ルカーチの「ローザ・ルクセンブルク論」である。

本稿は、以上の問題関心を受けて、『歴史と階級意識』における《自然発生性と意識性》の問題の転回＝移動をテーマに設定する。このテーマに対して考察するために、『歴史と階級意識』における「ローザ・ルクセンブルク三部作」を検討する。第2節では、《ローザの資本蓄積論》の転回＝移動を論じる。第3節では、《ローザのロシア革命論》の転回＝移動を論じる。第4節では、《ローザの構成的権力論》の転回＝移動について、バルフ・スピノザとアントニオ・ネグリの構成的権力論を参照しつつ、論じる。

第2節　理論の系譜線 ―ローザの資本蓄積論

『歴史と階級意識』の第二論文「マルクス主義者としてのローザ・ルクセンブルク」は、ローザ・ルクセンブルクの主著『資本蓄積論』の課題と方法について論じた論文であり、ローザ・ルクセンブルクに対する追悼の論文である。ルカーチは、「マルクス主義者としてのローザ・ルクセンブルク」で、次のようなローザ・ルクセンブルクの「追悼文」を結語にしている。

「ローザ・ルクセンブルクの生涯をかけた仕事のなかで理論と実践との統一を特徴づけていることといえば、勝利と敗北、個々の運命と総体の過程との統一が彼女の理論と生活の導きの糸をなしているということである。ベルンシュタインとの第一論争で、ローザ・ルクセンブルクはすでにプロレタリアートの側で国家権力を奪取することは『はやすぎる』が不可避だと主張し、さらに、これを前にしてふるえている日和見主義者の革命への不信を、『社会発展を機械的に理解することにもとづく、階級闘争とは無関係に、それとは別個に定められた時期を、階級闘争の勝利のために想定するという政治的たわごと』だと暴いた。ローザ・ルクセンブルクはこうした確固たる信念をプロレタリア解放闘争のなかへ、資本主義社会における物質的奴隷からのプロレタリアートの経済的、政治的解放と、日和見主義における精神的奴隷からのイデオロギー的解放の闘争のなかへ、持ちこんだのである。彼女はプロレタリアートの偉大な精神的指導者として、主にこの―克服しがたいためにいっそう危険な―敵に対して戦った。だから、彼女が真にもっとも腹立たしい敵シャイデマンとノスケの手にかかって死んだことは、彼女の思想と生涯に有終の美を与えるものである。ローザ・ルクセンブルクが理論では数年前に、戦

術では行動の瞬間に大衆の一月蜂起の敗北をはっきり予見しており、そして彼女の運命もまた敗れたことは、まさしく彼女の殺害者たち、すなわち社会民主党の日和見主義者たちが当然とるべき報復であったのだが、そのことはまた同時に彼女の政治的実践における理論と実践との統一から生じる正しい帰結なのである」[6]。

ルカーチは、1922年12月24日にウィーンで書いた『歴史と階級意識』の「序言」で「ローザ・ルクセンブルクこそ、経済学の内容という意味においても経済学の方法という意味においても、マルクスの生涯の仕事をほんとうに引き継ぎ、そのなかでこれを社会発展の現段階に具体的に結びつけた、ただ一人のマルクスの学徒」と位置づけた[7]。そして、ルカーチは「マルクスの経済理論と同じくローザの蓄積論においても経済学の内容の正しさを問題にするのではなく、その方法的前提と結果だけを追求する」という方法論上の問題に重点を置いた[8]。「ローザ・ルクセンブルクの主著『資本蓄積論』は、マルクス主義の俗流化がおこなわれてから十年後に、この全体性（Totalität）の問題を提起したのである」[9]。「マルクス主義がブルジョワ科学と決定的に区別する点は、歴史の説明において経済的な動因の支配を認めるところにではなく、全体性という観点をもつところにある。全体性というカテゴリー、すなわち部分に対する全体の全面的、決定的な支配ということ、これこそマルクスがヘーゲルから受け継ぎ、根本的に作りかえてまったく新しい学問」の方法としたことである[10]。すなわち、ブルジョワ科学とは資本制的社会構成体を無条件に擁護するという価値観やイデオロギーを伴った学問であるのに対し、マルクス主義は、資本制的社会構成体について「全体性」という学問の方法論によって理論的に解明しようとした。ルカーチが、「全体性」を重視するのは、ベルンシュタインに代表される修正主義者たちは資本家階級と労働者階級という二つの階級の闘争と自己構成の問題として資本制的社会構成体の理論を捉えていないからである。資本制的生産の総過程から生産者が分離し、資本制的生産に実質的に包摂された労働過程が物象化され、社会が諸部分に分解されて無計画に相互に無関係に生産する諸個人になると、資本主義の思想、科学、哲学もまたそれらに強く影響されざるを得ない。これに対して、プロレタリアートの学問は、根本的に革命的なものであって、ブルジョワ社会に革命的実践を対置する。方法そのものが革命的本質をもつ。「全体性」のカテゴリーこそが、科学における革命的原理の担い手である。ルカーチが資本制的社会構成体の「全体性」の問題を提起するのは、帝国主義世界の階級闘争を科学的な認識＝理論と関連づけているからである[11]。『資本蓄積論』をめぐってオットー・バウアーやグスタフ・エックシュタインらが行った論争は、資本蓄積の問題の解決が正しいか否かではなく蓄積論そのものに問題があるか否かをめぐってなされた。ルカーチによれば資本蓄積の問題は、国民経済学における個別資本の「部分」の分析からは理論的に解明できない。「ローザの批判者たちは、『資本蓄積論』の最も重要な章（蓄積の歴史的諸条件）を不注意にも見逃している」[12]。彼らはマルクスの諸表式が正しいか、またどうしたらこれらの諸表式をもっともよく解釈できるかという問題を提起したが、資本制的社会構成体のなかでより包括的な問題提起へと進まざるを得ないことを見落としているのである。それは『資本論』第一部の「本源的蓄積」についての問題提起である。ルカーチは次のように論じる。ローザ・ルクセンブルクは、死後公刊された「特別の小冊子」のなかでマルクス主義の俗流経済学を論破した。それは『資本蓄積論』第二章「資本主義発展の運命に関す

る問題」と同じ表現で正しく論駁した。ローザはマルクスの単純再生産と拡大再生産の分析を研究全体の出発点とし、資本蓄積の問題を究極的に取り扱うための序曲とした[13]。

ルカーチによれば、『資本蓄積論』は、若きマルクスの『哲学の貧困』の方法と問題を再び取りあげたことに特徴がある。ルカーチのこの指摘は重要である。『哲学の貧困』では、リカード経済学が可能となり妥当となるような歴史的条件が分析されている。『資本蓄積論』では、『資本論』第二部から第三部までの断片的研究と同じ方法が適用されている。マルクスが『哲学の貧困』においてプルードンを論破した方法は一方ではリカード、他方ではヘーゲルというように「真の源泉」にまで遡ってつかむことであった。『哲学の貧困』は、プルードンの価値論と経済学体系を批判した二章から成り立っている。第一章のプルードン批判は、プルードンの「構成された価値」をリカードからの継承として捉え、リカードとは本来異なったスミス的な論理から作られたプルードン価値論とリカードの価値論との差異を指摘し、これをリカードからの乖離＝歪曲として論難したものである。マルクスはプルードンの価値論のなかにリカードを読み込んだのである。第二章のプルードン批判は、プルードンの「体系」が歪曲されたヘーゲル弁証法によって構成されている点であった。ルカーチによれば、ブルジョワ経済学は、スミス、リカードが発見した「自然法則」と社会的現実を同一視した。資本蓄積が数学的範式という真空体のなかで何ら問題なく、世界戦争なしにおこなわれうるように資本主義的発展を捉えざるを得なかった。リカードらの「自然法則性」を社会的現実と同一視すること、それは「勃興期の資本主義のイデオロギー的自己防衛」である。抽象を社会総体と同一視点にしたオーストリア学派のマルクス解釈も勃興期の資本主義の「合理性」の自己防衛である。「プルードンがどこで、どうして、とりわけ何故、リカードとヘーゲルを誤解せざるを得なかったかを分析することが、プルードンの自己矛盾を容赦なく照らしだす光の源泉」である[14]。のみならず「この誤りの根本原因であるプルードン自身も知らないあいまいな根拠まで、すなわちプルードンの思想が理論的に表現している階級関係まで、明るみに出す光原なのである」。『資本論』と『剰余価値学説史』とは、本質上ひとつの著作であって、内容の構造は、『哲学の貧困』のなかで見事にまた太い線でスケッチされ提出されていた問題が、内容的に充実化されているからである。『精神現象学』におけるヘーゲルの哲学的方法、すなわち、哲学の歴史であるとともに歴史の哲学であるというヘーゲルの哲学的方法をマルクスは決して抹消しはしなかった。「弁証法的方法という場合重要なことは、歴史過程の全体性認識」であり、「事実、問題史は一つの問題の歴史となる」のである。こうして「哲学の歴史は歴史の哲学」となるのである[15]。

ルカーチは、ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』とレーニンの『国家と革命』を挙げ、理論的にマルクス主義を再生し始めたこの二つの書が、表現上でも「若きマルクスの形式」に立ち返っているのは決して偶然ではないことを指摘している。ブルジョワ科学が理論と歴史とを方法的に区別し、また、個別性の問題を原理的・方法的に分離し、「全体性」の問題を閉め出すのに対し、ローザとレーニンの二つの著作は、問題提起に先行する思想の変化と推移を分析し、思想的解明や混乱のそれぞれの段階をそれらの諸条件ならびに諸結果の歴史的総体のなかで観察することによって、「独自の問題提起と解決とを実質的に生み出した歴史過程とを実質的に生み出した歴史過程そのものを浮かびあがらせている」[16]。レーニンの叙述は19世紀

のヨーロッパ革命の内面史であり、ローザの文献史的叙述は、「資本主義体制の可能性と展開をめぐる闘争の歴史」なのである。

ルカーチはこのように資本蓄積論争を跡づけ、資本蓄積が資本制的生産の総過程のなかで取り扱われることによって資本制的社会構成体の総体を貫く弁証法に高まるとする。ルカーチは『資本蓄積論』から次のように引用している。「マルクスの再生産表式が現実に照応するとたんに、この表式は蓄積運動の終結または歴史的限界を、したがって資本主義的生産の終局を示すのである。蓄積が不可能だということは、資本主義的には、生産諸力のそれ以上の発展が不可能なことを、したがってまた資本主義の崩壊が客観的・歴史的に必然的なことを意味する。その結果、資本の歴史的生涯の終局的時代としての、最後の帝国主義的矛盾にみちた運動が生ずる（傍点筆者）」[17]。ルカーチがローザを高く評価するのは『資本蓄積論』における資本主義崩壊論、すなわち、「恐慌論」を社会主義と結びつけたからに他ならない。ローザは資本主義の崩壊と社会主義は「不可避」だという。ルカーチによれば、《資本蓄積の可能性に関する疑問》が資本蓄積の不可能性という弁証法的な確信にまで高まるならば、小ブルジョワ的・反動的なすべての性格の跡形はなくなり、この疑問は来たるべき社会革命の楽観論となり、理論的確信となる。オットー・バウアーが資本蓄積の可能性を肯定する態度には、ジャン＝バティスト・セイ、またはツガン・バラノフスキーのような陽気な文字通りの楽観論はみられない。《資本蓄積の可能性に関する疑問》が小ブルジョワ的に動揺する、臆病で曖昧な性格を帯びることになる。「バウアーや彼の賛同者たちは、たとえマルクス主義的な用語をもちいてはいようとも、彼らの本質はプルードン的である」[18]。彼らは資本蓄積の問題を解消しようとしたが結局プルードンが資本主義的発展の「良き側面」を保持し、「悪しき側面」には目を背けるようにしたことと同じ結果になる。だが、資本蓄積の問題は「悪しき側面」が資本主義の内面的本質と分かちがたく結びつき、帝国主義と世界戦争、世界戦争と世界革命を、資本主義の発展の必然性として捉えなければならないことを意味している。『資本蓄積論』以後に公刊されたレーニンの『帝国主義論』（1916）においては、資本主義の発展にとって資本主義の「最高段階」としての帝国主義は「植民地、半植民地、従属国」を世界市場の内的構成要素として産出し包摂することを特徴にしていた。しかし、ローザにおいては資本主義による非資本主義諸国の搾取は歴史的連続性にあり、「資本にとっての外部の市場は、資本の生産物を吸収し、資本に生産要素と労働力を吸収する、非資本主義的な社会的環境」であり、搾取の具体的な形態なのである[19]。ローザは『資本蓄積再論』で次のように論述する。「このような見解がゆきつくところは、ブルジョワジーにむかって、帝国主義や軍国主義というものが、かれら自身の資本主義的な利益という見地からみて、かれらにとって有害なものであることを説くことであり、これによって、この帝国主義のいわゆる一握りの受益者たちを孤立させ、プロレタリアートと広汎な市民層との同盟を結成し、帝国主義を《鎮圧》し……その刺をぬくことである。自由主義がその没落期に説得しがたい王朝から離れて、より説得しやすい王朝に訴えたのと同じように、《マルクス主義中央派》は忠告しがたいブルジョワジーから離れて、教えやすいブルジョワジーに訴えようとするのである」[20]。ルカーチは、若きマルクスが「全体性」の方法論でその当時なお興隆していた資本主義の死相をはっきり照らしだしたのと同じように、ローザ・ルクセンブルクが資本主義の根本問題を歴史過

程についての「全体性」の方法論で理論的に分析することによって資本主義の最後の開花に、ぞっとするような死の舞踏つまり「オイディプスの歩んだ道」という性格を与えたというのである[21]。

第3節　理論の系譜線
―ローザのロシア革命論

ルカーチは、1919年のハンガリー・評議会（タナーチ）共和国崩壊後、ウィーンに亡命していたが、『コムニスムス』に論文「議会主義の問題によせて」（1920年3月1日）を発表して、ヨーロッパの共産主義運動における戦略・戦術問題のひとつとして《議会主義》の問題を考察する。ルカーチは次のように論じる。「議会の枠のなかでブルジョワ社会にたいする鋭い批判が可能であるかのようにみえる事実こそは、プロレタリアートの階級意識をくもらせるのに貢献するものであり、これこそはブルジョワジーにとって願ってもやまないことなのだ。ブルジョワ議会制民主主義なるフィクションは、ほかでもない、議会というものが階級的抑圧の機関ではなく『国民全体』のための機関であるようにみえる、ということにこそ依拠しているのである」[22]。また、ルカーチは「日和見主義と一揆主義」（1920年8月17日）において《自然発生性と意識性》の問題について、次のように考察している。「共産主義政党にとって組織とは行動のための前提条件ではなく、前提条件と結果とが行動をつうじてたえず相互にいりまじっているようなものだということ。いやそれどころか、もしもこれらふたつの観点のうちのどちらかが一方を優位におくとすれば、組織とは、前提条件としてよりはむしろ結果としてとらえなければならないものなのだ」[23]。「ただひとつ革命過程の全体性のみが、共産主義的行動の導きの糸を生み出すことができる」[24]。さらに、ルカーチは「大衆の自発性（Spontanität der Massen）から出発せず、この自発性を無意識のままに煽ってきた諸要求を意識化することを目的とせず、この自発性をこの方向に、つまり革命過程の全体性にそった方向に導く努力をしないような行動は、どれほどかれらのスローガンが平明で、『現実政策的』であろうと、すべての地からはなれた空虚な空間をただようものでしかない」と論じる[25]。

パウル・レヴィはローザ・ルクセンブルクがブレスラウ刑務所で書いた「ロシア革命論」草稿を1922年1月に出版する。レヴィは、「ロシア革命論」草稿の成立事情を「序文」で次のように書き記している。

「1918年夏にローザ・ルクセンブルクは、ブレスラウ監獄から『スパルタクス書簡』のために論文を書き、そのなかでボルシェヴィキの政策を批判的に論じていた。それは、ブレスト・リトフスク以降の時期、補足協定の時期であった。彼女の友人たちはその公表を当時、時を得ないものと考え、私もかれらと同じ意見であった。しかし、ローザ・ルクセンブルクが頑強にその公表を主張したので、私は、1918年9月にブレスラウの彼女のもとに赴き、長時間じっくり話し合った後に、彼女を納得させることはできなかったものの、彼女が最近書いたボルシェヴィキの戦術批判の論文の印刷を断念することに決めた。彼女は批判の正当性を私に納得させるためにこの小冊子を書いた。彼女は獄中から信頼する女友達を通じて、その内容の概要を私に知らせ、ロシアにおける事態への詳細な批判を書く仕事に熱中していると伝えてきた。〈私はこの小冊子をあなたのために書いているのです。もしこれであなたを納得させることになれば、それだけでもこの仕事は無駄ではなかったということです〉と彼女は書きそえてあった」[26]。

レヴィがローザの「ロシア革命論」草稿を出版する直接のきっかけとなったのはドイツ革命の敗北という歴史＝政治の経験によりドイツ共産党からもコミュニストインターナショナル（略称は「コミンテルン」、いわゆる「第三インターナショナル」）からも排除され、そこへの復帰の道がほとんど閉ざされていたからである[27]。ちょうどその頃、クラーラ・ツェトキーンがローザの著作集刊行の計画を抱えてモスクワから帰国したという事情もある。ルカーチによれば、レヴィがローザの「ロシア革命論」草稿の発表を企てたのはドイツ共産党の名誉回復やコミンテルンへの信頼ではなくて、彼女の遺稿は、コミンテルンとその諸分派を精算するための理論を与えるためである。そのためにはローザ自身が後に見解を変えたということを指摘するだけでは不十分であり、ローザの名誉ある権威によってドイツ革命の理論的基礎を与えなければならないのである。ローザの「ロシア革命論」草稿は、世界戦争とロシア革命の経過と経験によってドイツ革命の戦略的・戦術的問題を再考したものである。ローザは、フランツ・メーリング、クラーラ・ツェトキーン、カール・リープクネヒトと共に左翼反対派を指導し、1915年には『インターナツィオナーレ』を編集した。とりわけ、冒頭論文においては社会民主党の政治的破産と第二インターナショナルの崩壊を規定し、シュツゥットガルト大会の決議に相応しいインターナショナルの再建を呼びかけていた。1916年には非合法団体「スパルタクス・ブント」を結成し、ローザは、もっぱら非合法的文書によって積極的な反戦活動を行った。独立社会民主党の結成に際しては、形式的にこの党に属し、左翼急進派を形成した。ローザは国家権力によって獄中にあったが、獄中からユニウス・ブロシューレと呼ばれる「社会民主党の危機」という論文を書き、スパルタクス団の活動を援助した[28]。ローザは「ロシア革命論」草稿の冒頭で次のようにいっている。「歴史的課題を遂行する点で未熟なのは、ロシアではなく、ドイツ・プロレタリアートであることが、戦争とロシア革命との経過によって明らかにされた。このことをどこまでもはっきりと示すこと、これがロシア革命の批判的考察の第一の課題である」[29]。ローザは、ロシア革命の持続にとってきわめて困難な国際情勢を展望し、それゆえに西ヨーロッパ、とりわけドイツにおける革命の勃発こそが、この困難な情勢を切り開く唯一の活路と認識した。ローザの情勢認識はきわめて妥当なものであった。ローザが、ロシア革命を画期的な政治的事件として捉え、ドイツ革命に繋がる問題として捉えていたのは明らかである。それに先立つ論考においても1905年革命の敗北の原因として「西欧」の立ち遅れを強調していた。ローザはロシア革命の置かれた恐るべき困難さを誰よりも深く認識していた。そして、今度こそ、ドイツに革命が起きなければならないとローザは考えていた。それゆえ、ロシア革命の運命に対してはドイツのプロレタリアートが、重大な責任を負っていると考えていたのだ。ローザの「ロシア革命論」草稿の課題は、「世界革命」が展望されるなかで、世界資本主義の資本蓄積の不可能性による資本主義の崩壊論や「ロシア革命」を理解していないメンシェヴィキおよびカウツキー批判であり、また、ドイツ・プロレタリアートが果たすべくして果たし得ない状況下で生じた「ロシア革命」の困難さに限界づけられたボルシェヴィキの「誤謬」に対する批判である。ローザの批判の主たる問題は、憲法制定議会と民主主義、農業問題、民族問題が支柱となっている[30]。ローザのレーニン批判は、1904年のレーニンの著作『一歩前進、二歩後退』について『ノイエ・ツァイト』誌で公表した批判や、スパルタ

クス綱領の起草などで行われている。ローザにとって「プロレタリアートの独裁」は、「無制限、最大限の民主主義」が行われ、大衆の自然発生性と革命性に依拠されなければならない。ローザは、「全権力をソヴィエトへ」というスローガンと「憲法制定議会の招集」というスローガンを並行して考えていたがゆえに、ボルシェヴィキの憲法制定会議の解散には同意することができなかった。ローザのいう「無制限の民主主義を伴った独裁」とは「背骨としてのソヴィエトと、同時に憲法制定議会と普通選挙権」「完全な出版・言論・集会の自由」を意味していた。ローザは「ロシア革命論」草稿で社会主義と自由および民主主義の関係について次のように述べている。

「社会主義はその本質からいって強制されたり、指令によって導入されたりするものではないことは、明らかである。……否定、破壊は命令することができるが、建設、積極的なものの創造は命令ではできない。……ただ何の拘束もない、湧きたつような生活だけが、無数の新しい形態を、即興曲を考えだし、創造的な力をもち、あらゆる誤りを自ら正すことができる。自由を制限された国家の公共生活は、民主主義の排除によってあらゆる精神的な豊かさや進歩の生き生きとした源泉を塞いでしまうからこそ、息苦しく、惨めで、形式的で不毛なものとなる」[31]。「政府の支持者のためだけの自由、ある党のメンバーのための自由は―その数がどんなに多くとも―けっして自由ではない。自由とはつねに異なった考え方をするものの自由である（Freiheit ist immer Freiheit der Andersdenkenden.）それは“公正”を狂信するからではなく、政治的自由のもつ活性化、健全化、浄化の力はまさにこの本質にかかっているからであり、もし“自由”が特権となれば、この力は失われるからである」[32]。この場合の“自由”が特権となるということは、特定の政府の支持者のための“自由”、あるいは、ある政党のメンバーのための“自由”であるという不公平な“自由”が特権となれば、政治的な“自由”がもつ力（活性化、健全化、浄化）は失われる、ということを意味している。

レヴィによる「ロシア革命論」草稿の出版はドイツ国内外での大きな反応をもたらした。その多くが「ボルシェヴィズムに抗するローザ・ルクセンブルク」といった内容のものであった。「ロシア革命論」草稿に対して、アドルフ・ヴァルスキーが「革命の戦術問題に対するローザの立場」を発表し、クラーラ・ツェトキーンは『ロシア革命に対するローザ・ルクセンブルクの立場』という小冊子を刊行した。彼らはローザと長年親交があった人物であった。また、レーニンは「ローザは誤りにもかかわらず、やはり鷲であったし、いまも鷲である」という「政治家の覚書」を書いた。ヴァルスキーとツェトーキンは、ローザとボルシェヴィキとの差異は、本質的なものではなく、ローザは獄中におけるボルシェヴィキ批判をドイツ革命の経験によって改めたということであった。ローザの遺稿を反ボルシェヴィキのために利用するのは「遺言状の偽装」だというのである。

ルカーチは、ローザの「ロシア革命論」草稿を理論的に考察し、1922年2月に『インターナツィオナーレ』に3回に亘ってローザのロシア革命論の批判的考察を連載する。編集部は、冒頭にてルカーチの論文がヴァルスキー論文の発表以前に書かれたこと、両者は「大抵の基本的な問題では一致しているが、本論文をとくに討論のために本誌に掲載するのは一般に本質的な点で議論が行われていないからだ」と断っている[33]。ルカーチの「ローザ・ルクセンブルクの『ロシア革命批判』についての批判的考察」は、ローザの理論を継承しつつ同時に「ロー

ザ・ルクセンブルクの見解の中の中心問題であるプロレタリア革命の性格に関する誤った判断を導いている方法的視点は何であったか」を示すことであった[34]。ルカーチの論文は、ドイツ共産党の歴史のなかで、ローザ・ルクセンブルクの理論を批判した最初の例であった。すなわち、ルカーチは、《自然発生性と意識性》の問題についてのローザ・ルクセンブルクの理論を転回＝移動したのである。

第4節　理論の系譜線
―ローザの構成的権力論

ルカーチのローザ・ルクセンブルク論には、階級闘争および階級意識の形成におけるプロレタリア大衆の「有機的自然成長論」がある。ローザは「ロシア革命論」草稿で「社会主義へのイデオロギー的自然成長」を主張する。「社会主義的社会制度は、経験という独自の学校から、生きた歴史の生成から、機が熟して生まれてくる歴史的な産物であるべきものであり、また歴史的な産物であり得るものであって、この点では有機的自然と全く同様であり、結局はその一部をなすものであって、現実の社会的な要求とともにその要求を満たす手段をも、課題と同時にその解決をもたらすという美しい習慣をもっているのである」[35]。ローザは、資本主義から社会主義への移行は革命期には危機に陥りやすく、また逆転しがちなものであることをはっきりと見抜いていた。にもかかわらず、ローザが「歴史を指導する使命をもつ階級のなかで、革命の自然発生的・本能的な諸力を過大に評価したことが、立法議会に対する彼女の態度を規定」してしまった。ルカーチによれば、ローザ・ルクセンブルクとレーニンとの対立は「日和見主義に対する闘争がプロレタリアートの革命的党の内部での精神的な闘争であるのか、それともこの闘争が組織の分野でおこなわれるものであるのか」という点で生じた[36]。ローザは、ボルシェヴィキが労働者運動のなかの革命的な精神を保証するものとして組織問題に中心的な役割をおいたことを、行きすぎと見た。何故なら、ローザは「真に革命的な原理というものはもっぱら大衆の本能的な自然発生性に求められるべきものだ」という見解をとっているからである[37]。「自然発生的な大衆闘争の革命的・『有機的』理論は、まさしくこの日和見主義的な発展理論に対する闘争のなかで、成立したものなのである」[38]。「この革命的・『有機的』な理論は、―そのもっともすぐれた主張者が賢明な留保をしたにもかかわらず―結局、経済的な状勢の絶えざる尖鋭化、必然的に開始される帝国主義的な世界戦争、それらに続いて近づく革命的な大衆闘争の時期が、社会的・歴史的な必然性をもって、プロレタリアートの自然発生的な大衆行動を惹起する。そしてまた、革命の目的と方法とに関する明確さというものも、この大衆行動の指導のなかではじめて証明されることになろう、という結論に達したのである。したがって、この理論は、革命の純粋にプロレタリア的な性格というものを、暗黙の前提としているのである」[39]。

ルカーチはローザの理論を次のように論じる。「ローザは一方で、ボルシェヴィキの戦略・戦術を肯定して評価するにもかかわらず、他方で、ローザがボルシェヴィキの理論に反対してこれを非難する時、ロシアのプロレタリア革命に関する彼女の評価の本質が示されている」。すなわち、「ローザはロシア革命の純粋にプロレタリア的性格を過大に評価」し、「プロレタリア階級が革命の最初の局面でもちうる……外面的な力および内面的な明確さと成熟度を過大に評価している」[40]。そして、同時に、その反面として、「革命における非プロレタリア的な要素

のもつ意義を過小に評価している」。しかも、「階級の外部では非プロレタリア的な要素を、プロレタリアそのものの内部ではこうしたイデオロギーの力を、ともに過小に評価している」のである。そして、「このような革命の真の原動力に対する誤った評価は、もっとも決定的な点で、彼女に誤った立場をとらせた。すなわち、革命における党の役割の過小評価に、経済的発展の必然性につき動かされる本能的なものに対する意識的・政治的な行為の過小評価に導いたのである」[41]。つまりボルシェヴィキの戦略・戦術がプロレタリア革命の始まりの過渡期の戦略・戦術であったことを考慮せずに、ローザは「日々の要求に対してはいつも革命の来たるべき段階の原理を対置させ」、革命勢力を反革命と闘うために動因する必要性を見落としだのだ。このことが「暴力、民主主義、ソヴィエト体制、党についての本小冊子の行為を終局的に決定する基礎となっている」と、ルカーチは主張する。ローザは「歴史発展の有機的性格を過大に評価」し、暴力を「否定的なものの除去」のためにのみ認めたが、ローザにとって「プロレタリア国家（ソヴィエト体制）はすでに結実した経済的社会的変革のあとで、そしてその結果、はじめてイデオロギー的な『上部構造』として成立しうる」ものである[42]。それに対し、ルカーチにとってのソヴィエト制は「移行期を管理する闘争形態であり、社会主義の諸前提を闘い取るための闘争形態」である。それは資本主義と競合する段階で、社会主義は「おのずから」経済発展の自然法則性によって成立するものではなくて、先取りされた社会主義社会を現実に意識的に貫徹させるための器官となるというように考えるからである。ルカーチからすればローザは、自然発生性に基づく「プロレタリア独裁」を想定していた。しかし、「ブルジョワ革命の構造的諸形態のもとでプロレタリア革命を考えている」[43]。確かにローザは、1917年革命を1905年−1907年革命の直接の連続としてブルジョワ革命と規定したが、1917年の11月革命を社会主義革命と規定してはいない。ローザは「イギリス大革命やフランス大革命の発展のシェーマに一致する」としている。ローザは、プロレタリア革命の場合、イギリス革命やフランス革命のようなブルジョワ革命の構造的諸形態とは異なることを明確にしないまま社会主義の必然性を論じた。これらのことがローザのドイツ革命についての理論の制約＝限界を生んだのである。

社会主義への必然性のテーマは《自然発生性と意識性》の問題へと転回＝移動する。そしてこの論点は、後の「組織問題の方法論」において深められることになる。ルカーチのこの論考は「革命的イニシアティヴの組織的諸問題」（1921年6月）の改稿によるものである。この問題についてさらに理論的に考察を加えたのが『歴史と階級意識』の第三論文「階級意識」に他ならない。この論考は、『コムニスムス』（1920年）に2回にわけて発表されたものであるが、大幅に加筆され、マックス・ウェーバーの社会科学方法論の骨格をなす「理念型」（Idealtypus）という概念装置を導入することによって、理論的な考察を遂行した。ルカーチは《階級意識の理論》を、心理学的な意識とプロレタリアートの階級意識とを峻別して、「理念型」を用いて「階級意識の客観的理論は、階級意識の客観的可能性の理論」として定式化した[44]。ルカーチはこの《階級意識の理論》によって、《自然発生性と意識性》の問題に対する回答が陥った理論的なジレンマを克服できると考えたのである。ルカーチの《階級意識の理論》は、社会主義意識の単なる「外部注入論」ではなく、「党と階級」についての前衛党モデルでもない。

「プロレタリアートの諸層の深く進んだ類型分けの内部においても、また階級闘争の問題の内部においても、しばしば提起されるのは、階級意識の客観的可能性を実際に実現する、という問題なのである。このような問題は、従来はただ非凡な個人にとっての問題にすぎなかった。……だがこの問題は、いまでは全階級にとって現実の焦眉の問題となっており、プロレタリアートの内部変革の問題、プロレタリアートがみずからの客観的・歴史的使命の段階へ発展とする、という問題になっているのである。そこには一つのイデオロギー的危機が、すなわち、その解決が経済的世界危機の実践的な解決を可能にするような、イデオロギー的危機があらわれているのである。プロレタリアートが、この場合、イデオロギー的に進んでいく道の長さについて幻想をいだくことは、大きな弊害をもたらすであろう。しかし同様に弊害が大きいのは、資本主義をイデオロギー的に克服する、という方向づけにおいて、プロレタリアートのなかで活動している力を見逃すことである。いかなるプロレタリア革命も―ますます高まり意識的になるという仕方で―国家機関にまで成長した全プロレタリアートの闘争機関を、すなわち労働者評議会を生み出した、という事実こそ、たとえば、プロレタリアートの階級意識が、その闘争のなかでかれらの指導層のブルジョワ性を克服して勝利しつつある、ということの一つのしるしなのである。革命的な労働者評議会は、けっして日和見主義的なカリカチュアと混合されてはならない。それはプロレタリアート階級の成立以来、プロレタリア階級の意識がたえず獲得しようと努めた形態の一つなのである。労働者評議会が存在しているということ、それがたえず発展しているということは、プロレタリアートがすでに自分自身の入口のところに、したがって勝利の入口のところに立っている、ということを示している。なぜなら、労働者評議会は、資本主義的物象化を政治的・経済的に克服するものだからである」(45)。「プロレタリアートの階級意識が、階級全体の思考と方法に関して、過程的かつ流動的な性質のものであるとすれば、このことは階級意識の組織的形態のなかに、つまり共産党のなかに、かならず反映するはずである」(46)。ルカーチの「プロレタリアートのなかで活動している力」という概念は「構成的権力」（pouvoir constituent）の概念によって包摂される。アントニオ・ネグリが『構成的権力』で表現した「構成的権力」概念は、スピノザを経由して構成された概念である。スピノザによれば、自然は、まず第一に活動する力としてある。「能産的自然」（natura naturans）と「所産的自然」（natura naturata）とは、この力の主体と力の客体と見なすことができる。つまり、自然とは生産力に他ならない。「自然のなかにはそれよりもっと有力でもっと強大な他の物が存在しないようないかなる個物もない。どんな物が与えられても、その与えられた物を破壊しうるもっとも有力な物が常に存在する」(47)。自然権の作動は、自然権の行使を不能ならしめる。スピノザによれば、自然権の行使は、「社会状態」において始めて可能になる。「各人は、その有するすべての力（potentia）を社会に譲渡すればよい。それによって社会のみが最高の自然権を、すなわち最高の統治［権］を保持し、各人はこれに対して自由意志によって、あるいは重罰への恐れによって従わなければならないのである。このような社会の法［権利］を民主制（Democratia）と名づける。すなわち、民主制とは、人間がなしうる一切のことにたいする最高権利を共同的に有する人間の普遍的結合と定義することができる」(48)。「統治体（imperium）すなわち最高権力の法は、各個人に力によってではなく、多数者（mulutitudo 大衆）―あたか

も一つの精神によって導かれる―の力によって決定される、自然法［権］そのものに他ならない」[49]。「国家（civitas）の法は多数者（大衆）の共同の力によって規定される」[50]。スピノザには、人民大衆の力が支配する三つの統治体の形式がある。君主制、貴族制、民主制である。スピノザは、大衆の国家を単に大衆のための国家ではなくて、大衆による国家の存在形態を解明しようとした。スピノザにおいては大衆はいかなる政体においても最高権力の形成母体である。スピノザが民主制の最高形式において推論した各人の自然権の委譲とは、ただちにその放棄を意味するものではなかった。各人の力の委譲から構成された力という概念のなかには、各人の力を超出し、逆にこれをコントロールする力であると共に、この力が各人の力の実現という目的に敵対した場合には、常にそれに対立する力として作動する淵源が仕組まれているのである。これは、「全ての限定は否定である」（omnis determination est negatio）という命題に照応している[51]。

ネグリの構成的権力論を経由することによって、ルカーチが定式化した《階級意識の理論》は、スピノザの《能産的かつ所産的自然》を基礎にした民主制論を継承して、転回＝移動する。ルカーチの《階級意識の理論》はプロレタリアートの階級構成の過程を「プロレタリアートのなかで活動している力」、すなわち「構成的権力」の作動の過程として再構成したのである。「構成的権力」の作動は、プロレタリア大衆の当事者意識に対する批判の過程を自己の作動の構成要素にして、階級意識を形成する。物象化された意識に対する批判を媒介にして階級意識が形成されるのである。そして、階級意識の形成は組織形態として表現される。すなわち、階級意識の形成とは自己権力機関＝闘争機関（アソシエーション）の形成なのである。プロレタリアートが階級意識を意識化することはプロレタリアートの階級闘争の機関の自己構成のことなのである。これは、プロレタリアートの階級構成＝形成であり、歴史的には、ロシア革命においては「労働者兵士評議会」（ソヴィエト）であり、ドイツ革命においては「労働者評議会」（レーテ）として現出した。

ネグリは『構成的権力』においてローザの理論を構成的権力論という理論装置によって再構成している。ネグリによれば、革命期のレーニンにとって、党は「構成的権力」を組織する媒介へ転回＝移動する。自然発生性にいかなる組織形態を与えるかという問題が中心的な位置をしめるところとなる。あるダイナミズムがここで構築されるのであるが、それは「構成的過程の自然発生的必然性に適合した組織化のダイナミズムであり、新国家の構成過程における大衆の生産的機能を称揚する西欧的ダイナミズムにほかならない」[52]。「ローザ・ルクセンブルクは、構成的権力のレーニン主義的実践に対する内的な評価から出発して、積極的に、つまり批判的に表明する。レーニンの党は、大衆の革命的精神と民主主義への希求を最大限の参加、一貫性、ラディカル性でもって支えながら、大衆を権力に導いた」。「大衆運動と党のイニシアティヴとの難しい駆け引きのなかで党が優勢になる。この大衆に対する党の優位は民主主義の敗北と独裁的・官僚主義的な管理体制の確立を意味する」。ネグリは、ローザの理論を「構成的権力」の概念装置と関連づけて四つの要素に分類している[53]。第一は、大衆のイニシアティヴとその民主主義的な組織、ソヴィエト運動である。第二は、このイニシアティヴの時間的なダイナミズム、変革的な力の発揮される期限とその無際限の企図を時間的に接合するその能力、第三は、「構成的権力」が経済的に根づくこと、そして政治的な場だけではなくて、とりわけ産業

的な場においても刷新を必然化する能力、すなわち、経済的民主主義と集散化の深化である。第四は、空間的次元、あるいは民族的な自己決定と中央集権化の弁証法で、ここにおいて労働者の国際的統合力の力で敵の推進する解体と分離の政治空間にたちむかって勝利することができるというものである。ネグリによれば「大衆民主主義だけが、構成的権力のあらゆる革命的構成要素を機能的に再組織し、新しい権力を民主主義的なプロレタリア独裁に変えることができる」のである(54)。

ローザは、大衆の自発性を解放して運動全体を活性化させるために、すでに官僚化していた社会民主党をいかに改革するかという課題に直面していた。ローザにとって決定的な要因は「大衆」であった。ルカーチによれば、ローザ・ルクセンブルクの「プロレタリアート」概念は、日和見主義者の見解とはまったく異なっている。「ローザは、きわめて深い洞察力をもって、革命的な状勢が、それまで組織されておらず、組織的労働にも到達しえていなかった、(農業労働者などの)プロレタリアートの大集団を動員することを、またこの大集団が、それを不遜にも未成熟な、『未発達な』ものとして取りあつかっている、党や労働組合そのものよりも、比べものにならないほど高度な階級意識を、その行動のなかで示すことを、見ぬいている。しかし、それにもかかわらず、彼女のこうした見解の基礎にも、革命の純粋にプロレタリア的な性格というものが横たわっているのである。一方では、プロレタリアートは闘争計画の上に統一的にその姿をあらわすのであるが、他方では、その行動が右のように取りあつかわれている大衆こそ、純粋にプロレタリア的な大衆なのである」(55)。それは「革命的な行動に対する正しい態度というものは、プロレタリアートの階級意識のなかに深く根ざし、深く本能的に根を張ることができるもの」であり、「革命的な行動そのものを正しい方法で続けてゆくためには、意識を喚起すること、すなわち明確な指導だけが必要となってくるものだからである」(56)。ルカーチの「プロレタリアート」概念とローザの「プロレタリアート」概念とは大きな隔たりはない。ルカーチはローザの立場に近い。「ローザ・ルクセンブルクは、革命的な大衆行動が本質的に自然発生的な性格のものであることを、他に多くの人びとよりも早く、またはっきりと認識していた(そこで、ローザは、このような行動が経済的な過程の必然性から必然的に生みだされてくるものだという、以前から確認されていたことの他の一面を取りあげたにすぎない)のであるが、まさしくそのローザが、同じように、革命における党の役割を、他の多くの人びと(カウツキー、ベーベル―筆者)よりも早くはっきりさせたことは、けっして偶然ではない」(57)。「ローザ・ルクセンブルクは、組織というものが革命的な過程の前提というよりはむしろその結果であって、プロレタリアート自身もまたこの過程のなかでのみ、そしてこの過程を通してのみ、みずからを階級に構成しうる(konstituieren)ものだということを、早くから認識していた」(58)。ルカーチは、「自然発生的大衆闘争の革命的な『有機的』理論」が、革命の「純粋にプロレタリア的性格」を暗黙の前提にしていることを指摘し、党の目的意識性が必要とされるとする。「問題なのは、プロレタリアートの階級意識が、客観的な経済危機と平行して、直線的に、プロレタリアート全体を通じて同じように、発展するものではないということである。またプロレタリアートの大部分が、精神的にはいぜんとして、ブルジョワジーの影響のもとにあるということ、そしてどんなに激しい経済的危機の展開さえも、そのプロレタリアートをこうした状態から離脱させるもの

ではないということである。つまり、プロレタリアートの態度や、危機に対するプロレタリアート自身の反応は、烈しさと強さにおいて、危機よりもはるかに遅れているということの方が重大である」[59]。ルカーチのこの記述は、資本主義の崩壊と社会主義の「不可避性」を論じた「マルクス主義者としてのローザ・ルクセンブルク」からの転回＝移動である。ローザ没後の1921年、統一ドイツ共産党による中部ドイツにおける大規模な「3月行動」の敗北に関するルカーチの論文「大衆の自然発生性と党の行動性」（1921年5月）は、ローザの自然発生性の理論の意義を踏まえつつ、意識性の理論と組織論の意義を強調している。「問題は、共産主義政党が……国家権力を掌握しうるためにはどんな組織的措置が必要か、などということではなく、どうすれば統一ドイツ共産党のイニシアティヴによる自立的な行動をとおして、イデオロギー的な危機が、プロレタリアートをつつんでいるメンシェヴィキ的な惰眠が、革命的発展の行きづまりが、克服できるのか、ということこそが問題なのである」[60]。ここで、ルカーチが問題にしているのは「プロレタリアートのイデオロギー的危機」である。ルカーチは、資本主義の危機にも関わらず革命が挫折する原因は、ブルジョワ支配階級からの弾圧にのみ帰せられるものではないとみている。むしろその原因は、革命主体であるプロレタリアート自身のうちに求められなければならない。それゆえ、「イデオロギー的危機の原因を追求しなければならない」。そして「この危機の精神的および組織的表現がまさにメンシェヴィズム」に他ならないのである[61]。プロレタリアートのブルジョワ化は、メンシェヴェキ的な労働者党、および指導する労働組合のなかで、独自な組織的形態をとっている。「プロレタリアートのイデオロギー的危機」は、ブルジョワ社会の客観的にきわめて不安定な情況が、古臭い連帯責任という形式で、個々のプロレタリアートの頭の中に反映していることに現われる。メンシェヴィキは、「プロレタリアートの意識の物象化（die Verdinglichung im Bewußtsein des Proletariats）を、イデオロギー的にかつ組織的に定着させ、それを相対的にブルジョワ化の段階に固定させる」役割を演じる[62]。プロレタリアートの大部分は、精神的には依然としてブルショワジーの支配を受けていて、どれほど急激な経済危機でも、彼らをこうした態度から救い出してくれるものではない。つまり、プロレタリアート自身の危機に対する反応は、熱烈さと強さにおいて、危機そのものより遙かに遅れるものである。革命闘争の経験は、プロレタリアートの革命的決断および闘争への意志が、単純に簡単に構成されることを決して示していない。革命的実践の正しい立場は、ただプロレタリアートの階級意識の中にだけ、深く根ざすことができる。肝心なことは「プロレタリアートの階級意識を喚起すること」である。すなわち、ルカーチにとっての「プロレタリアートのイデオロギー的危機」とは、メンシェヴィズムであり、いわば、「意識の物象化」なのである。「意識の物象化」こそ、プロレタリアートのイデオロギー的危機の本質的な問題なのである。それは『歴史と階級意識』の第四論文「物象化とプロレタリアートの意識」（1922年12月）の中心問題である。このように考えるとルカーチがマルクスの『資本論』から「物象化」論の端緒を見出しているのは、決して偶然ではないことがわかる。

「プロレタリアートの独裁」とはプロレタリア民主主義、すなわち「評議会民主主義」を実現する「内的な形式」であって単に国家権力を奪取することではない。「プロレタリアート独裁」は自己消滅、すなわち、党と階級という政治的関係の廃絶、「階級社会」の廃絶、国家権力の

死滅を意味するものでなければならない[63]。「革命の暴力」がいっさいの支配の暴力を廃絶するための最後の暴力、すなわち「神的暴力」（göttliche Gewalt）の手段となるためには、暴力の担い手が自らの死滅過程を自らの存在基盤へと組み込んでおくという形で可能となる[64]。プロレタリアートの「構成的権力」は、1956年のハンガリー革命、そして1968年のプラハの春を経て1989年のソ連東欧革命によって「自由な新たな空間」を創り出した。それは、いわば「抑圧されたものの回帰」であり、プロレタリアートの欲望の産出した「現われの空間」である[65]。

［註］

（1）修正主義論争については先駆的な西川正雄「ドイツ第二帝制における社会民主党―『修正主義論争』の背景」『年報政治学』日本政治学会、岩波書店、1966年、55-88頁。保住敏彦『社会民主主義の源流』世界書院、1992年。同じく「カウツキーとルクセンブルクの世界資本主義論」『経済論集』第120・121合併号、愛知大学法経学会、1989年、63-86頁の研究成果に基づいている。保住敏彦は、修正主義論争の争点からドイツ革命に至る学史・学説史を的確にまとめている。本稿は西川正雄や保住俊彦、伊藤成彦、さらには平井俊彦らの先駆的研究を踏まえ、批判的に継承・発展させたものである。

（2）ルカーチとローザを扱った先行研究には、以下のものがある。本稿ではドイツ革命の文脈で『歴史と階級意識』を取り扱う点でこれらと見解を異にする。平井俊彦「ルカーチのローザ・ルクセンブルク論」『甲南経済学論集』第5巻、第6号（第62号）甲南大学経済学会、1965年、45-66頁。M・ロヴィ（ママ）「ルカーチとルクセンブルク」『ローザ・ルクセンブルク論集』所収、山内昶訳、河出書房新社、1978年、96-113頁。南成四「ルカーチのローザ・ルクセンブルク論」『ローザ・ルクセンブルク論集』所収、情況出版、1971年、346-356頁。西永亮「革命における自由の創設と暴力―ルカーチのローザ・ルクセンブルク批判を手掛かりに」『年報政治学』日本政治学会、2000年、143－156頁。また、ダニエル・ゲランの『革命的自然発生』村上公敏訳、風媒社、1976年には、ローザに関連する同時代の多くの文献が収録されている。最近の動向では、安岡直による「『歴史と階級意識』の成立過程とその狙い」『秀明大学紀要』第8号、秀明大学、1-27頁、といった研究もあることを付記しておく。また、ルカーチの政治思想の概略については以下の文献を参照した。J. Kammler, *Politische Theorie von Georg Lukács: Struktur und historischer Praxisbezug bis 1929*, Luchterhand, Darmstadt, 1974., A. Grunenberg, *Bürger und Revolutionär : Georg Lukács 1918-1928*, Europäische Verlagsanstalt, Köln,1976.

『歴史と階級意識』とドイツ革命、とりわけ、1921年の中部ドイツにおける「3月行動」との関連ではルカーチの「初出」論考が執筆された時期と掲載誌は以下の通りである。テキストとしてはG.Lukács, *Geschichte und Klassenbewußtsein: Studien über marxistische Dialektik*, SL.11. Luchterhand Verlag, Neuwied,1970.（城塚登・古田光訳『歴史と階級意識』白水社イデー選書、1991年）を使用し、以下、*GuK*と略記する。また、平井俊彦による抄訳『ローザとマルクス主義』ミネルヴァ書房、1968年、相沢久訳『組織論』未来社、1958年も大いに、活用させて頂き、原文を参照しながら訳文を改めさせて頂いた。頁数は、煩雑を避けるために白水社版の頁数を記した。訳文は必ずしも同一のものとはなっていない。

①「議会主義の問題によせて」
Zur Frage des Parlamentarismus, *Kommunismus,* Nr.6,（März.1）1920, S.161-72.

②「日和見主義と一揆主義」
Opportunismus und Putschismus, *Kommunismus,* Nr.32,（Aug.17）1920, S.1107-15.

③「階級意識」
Klassenbewußtsein, *Kommunismus*, Nr.14,（Apr.17）, 1920, S.415-2. & Nr.15,（Apr.24）, 1920, S.468-73.→ *GuK*（1920年3月）
2回に亘って『コムニスムス』（1920年）に掲載された。

④「マルクス主義者としてのローザ・ルクセンブルク」
Rosa Luxemburg als Marxist, *Kommunismus*, Nr.1/2,（Jan.15）1921, S.4-19.→ *GuK*（1921年

1月）

⑤コミンテルン第三回大会を前にして（1921年5月15日付）

→ Vor dem dritten Kongreß, *Kommunismus*, Nr.17/18,（Mai.15）1921, S.583-92.

⑥「大衆の自然発生性、党の行動性」→（1921年5月）

Spontaneität der Massen, Aktivität der Partei, *Die Internationale*, Nr.6,（Mär.15）1921, S.208-15.

⑦「革命的イニシアティヴの組織的諸問題」（1921年6月15日付）

Organisatorische Fragen der revolutionären Initiative, *Die Internationale*, Nr.8,（Jun.15）1921, S. 298-307.

→「組織問題の方法論（*GuK*）」の原型

⑧「ローザ・ルクセンブルクの『ロシア革命批判』についての批判的考察」

Kritische Bemerkungen zu Rosa Luxembergs "Kritik der russischen Revolution", *Die Internationale*, Nr.8,（Feb.12）1922, S.186-89. & Nr.10,（Feb.26）1922, S.232-39, & Nr.11,（Mär.5）1922, S.259-62.

3回に亘って『インターナツィオナーレ』（1922年）に掲載された。→*GuK*（1922年1月）

⑨「組織問題の方法論」→*GuK*（1922年9月）

Methodisches zur Organisationsfrage

⑩Vgl. Paul Levi, *Proletár*, Nr.16,（Apr.21）1921. S.5f.

⑪Vgl. Vorwort zu Rosa Luxemburg: Massenstreik Előszó Rosa Luxemburg *Tömegsztrájk*, Verlag der Arbeiter-Buchhandlung, Wien, 1921, S.3-9.

⑫『レーニン論』（1924年）

Vgl. *Lenin : Studie über den Zusammenhang seiner Gedanken,* Verlag der Arbeiter- buchhandlung, Wien, 1924. & Malik-Verlag, Berlin 1924.

（3）G. Lukács,*GuK*,a.a.O., S.50.（8頁）

（4）Ebd., S.51.（9頁）

（5）ローザがドイツ社会民主党を背景に様々な形で広汎に展開するプロレタリアートを革命の担い手を見出したのに対し、ルカーチは資本主義が未成熟であった後進国ハンガリーを地盤としていたため、ハンガリー革命とドイツ革命とではプロレタリアートの展開が異なっていた。

（6）Ebd., S.117f.（95頁）

（7）Ebd., S.50.（8頁）

（8）Ebd.

（9）Ebd., S.41.（70頁）

（10）Ebd., S.94.（67頁）

（11）ここでいうルカーチの「全体性」のカテゴリーとは、戦後の「従属理論」や、「第三世界論」、イマニュエル・ウォーラースティンの「世界システム論」のモチーフである「中心・周辺」理論に通じる視点を合わせもっている。世界資本主義体制によって提起された問題を歴史的に不可分な二つの極によって統合された「全体性」として設定することを意味する。

（12）Ebd., S.99.（74頁）

（13）Ebd., S.102.（77頁）

（14）Ebd., S.103.（78頁）先行研究としては、例えば、森川喜美雄『プルードンとマルクス』未来社、1979年を挙げておく。

（15）Ebd., S.105.（81頁）

（16）Ebd.

（17）R. Luxemburg, *Gesammelte Werke*, Bd.5, Dietz Verlag, Berlin, 1975, S.364.（長谷部文雄訳『資本蓄積論（下）』青木文庫、1970年、501頁）以下、ローザの『全集』は、*GW*と略記。Vgl.G. Lukács, *GuK*, a.a.O., S.107f.（84頁）『資本蓄積論』は刊行されるや否や論争の的になった。代表的な例として1919年3月に創設されたコミンテルンによる批判があげられる。レーニンは、『資本蓄積論』が公刊された年に同書の検討を行い、『評注』ノートを残しており、第一次大戦が勃発した直後（1914年秋）にグラナール百科事典のために書かれた『カール・マルクス』の付録の文献目録ですでに、レーニンは、ローザのこの著作を評価して「マルクス理論の誤った解釈」と指摘している。しかし、後に公刊されたレーニンの『帝国主義論』（1916）は、帝国主義戦争によって生じた内乱のなかで資本主義は社会主義へと転化するという資本主義の崩壊論に立っており、ローザと問題意識を共有している。真木実彦「ローザ・ルクセンブルク『資本蓄積論』に対するレーニンの評注（上）」『商学論集』第36巻1号、福島大学経済学会、1967年、176-204頁。同じく（下）は、同論集、第36巻2号、1967年、141-179頁参照。レーニンが「コミンテルンの最大の理論家」と称したニコライ・ブハーリンの著作は、『帝国主義と経済政策』と『帝国主義と資本蓄積』である。『帝国主義と資本蓄積』は、1920年代のはじめソヴィエト・ロシアで発刊された『マルクス主

義の旗のもとに』に掲載されたものである。ブハーリンのこの著作は、ローザ・ルクセンブルクの『資本蓄積論』に対する徹底的な批判をめざしたものであり、1920年代にボルシェヴィキ陣営から加えられたローザの資本蓄積論に対する批判の代表作として知られている。1925年に発表されたブハーリンのこの著作は、レーニン死後のコミンテルン内部でスターリンとトロツキーとの対立があった時期のものである。重要なことは、ブハーリンの『資本蓄積論』の評価が、ブハーリン失脚、粛清後も引き継がれ、影響力をもつことになるということである。その原因は、これまでも指摘されてきたように『資本蓄積論』が、マルクスの『資本論』第2部の「拡大再生産表式」を否定したことであった。従って、ローザの『資本蓄積論』に対する理論的な評価付けは、マルクスの「拡大再生産表式」に対する彼女の主張をどう評価するかという問題に関連付けられることになる。先行研究が示すようにマルクスの『資本論』はエンゲルスの編集によるものであり、ローザは、『資本論』第二部三編のテキスト、すなわち「拡大再生産表式」を「未定稿」として判断した。それは、編者エンゲルスの説明によるばかりではなく、マルクスの「拡大再生産表式」では、帝国主義を理論的に説明できないと考えたからである。伊藤成彦『ローザ・ルクセンブルクの世界』社会評論社、1998年、86-89頁参照。その他、松岡利道『ローザ・ルクセンブルグ―方法・資本主義・戦争』新評論、1988年を参照。また、資本蓄積論争、とくに再生産表式論については、例えば、鶴田満彦「資本蓄積論争」『資本論の展開―批判・反批判の系譜』所収、同文舘出版、1967年、133-176頁参照。

(18) G. Lukács, *GuK*, a.a.O., S.108.（84頁）

(19) R. Luxemburg, *GW*, Bd.5.a.a.O., S.315.（432頁）

(20) Ebd., S.521.（長谷部文雄訳『資本蓄積再論』、岩波文庫、1935年、197頁）Vgl.G. Lukács, *GuK*, a.a.O., S.109.（85頁）

(21) Ebd.,S.102.（76-7頁）

(22) G.Lukács, “Zur Frage des Parlamentarismus”, in *Kommunismus : Zeitschrift der Kommunistischen Internationale für die Länder Südosteuropas*, Jahrg.1.H.6.Wien, 1.März.［Feltrinelli Reprint, Milano］, 1920, S.166.（池田浩士編訳『ルカーチ初期著作集3』所収、三一書房、1976年、93頁）

(23) G.Lukács, “Opportunismus und Putschismus”, in *Kommunismus*, a.a.O., Jahrg.1. H.32., Wien, 17.Aug., 1920, S.1109.（池田浩士編訳『ルカーチ初期著作集3』所収、前掲、153頁）

(24) Ebd., S.1110.（155頁）

(25) Ebd., S.1113.（158頁）

(26) ローザ・ルクセンブルクの「ロシア革命論」のパウル・レヴィ版は、Vgl.R.Luxemburg, *Die Russische Revolution : eine kritische Würdigung*, herausgegeben und eingeleitet von P.Levi,Verlag Gesellschaft und Erziehung G.m.b.H., Berlin, 1922, S.Ⅲ-Ⅳ.（伊藤成彦訳『ローザ・ルクセンブルクの世界』所収、社会評論社、1998年、122－123頁）パウル・レヴィ版には「副題」もつけられているが、「かなりの誤りや脱落箇所」があり、「草稿」であることを考慮し、本文中では伊藤成彦に倣って「ロシア革命論」草稿と表記する。伊藤成彦「はしがき」『ロシア革命論』所収、論創社、1985年、ⅰ-ⅲ頁参照。尚、レヴィ版の不完全さについては「マルクス主義研究週間」の提唱者であるフェリックス・ヴァイルの以下の文献参照。F.Weil, “Rosa Luxemburg über die russische Revolition”, in *Archiv für die Geschichte des Sozialismus und der Arbeiterbewegung*, Jahrg.13. Akademische Durck- u. Verlagsanstalt, Graz, 1928, S.285-298. 脚注のレヴィ版は、P.Levi（hrsg.）, *Die Russische Revolution* と略記。

(27) ここでいうドイツ革命の敗北とは、中部ドイツでの「3月行動」（Märzaktion）の敗北である。「3月行動」とは、1921年3月に中部ドイツの鉱山地帯マンスフェルトで起こった労働者の自然発生的な叛乱＝蜂起である。この闘争は、独立社会民主党左派とドイツ共産党が合同してできた統一ドイツ共産党が指導した最初の闘争である。警察や軍隊の弾圧による逮捕者は数千人にのぼり多数の死傷者が出た。パウル・レヴィを中心とするドイツ共産党右派指導部は、1920年末から社会民主党、共産主義労働者党、独立社会民主党およびその指導下にある労働組合に対して共同行動を呼びかけ、この呼びかけを『ローテ・ファーネ（赤旗）』（*Rote Fahne*）を通じて「公開状」（Offener Brief）（1921年1月8日付）という形で行う戦術をとった。だが、この「公開状」戦術は独立社会民主党、労働組合によって拒否され、結果として共産党内で左派の力が強まって「攻勢戦術」（Offensiv Theorie）

が党の基本方針として採択された。「3月行動」も、基本的にはこの戦術に基づいて行われた。コミンテルンからはハンガリー革命を指導した経験をもつベーラ・クンが送り込まれた。しかし、結果として「3月行動」は敗北に終わってしまった。そして、この敗北をめぐって、統一ドイツ共産党は、二つに分かれた。レヴィをはじめとする党内右派は、これを「一揆主義」であると決めつけた。議論は、「攻勢戦術」そのものの当否をめぐって闘わされざるを得なかった。党内左派は、客観的情勢に照らしてこの方針が正しいことを主張し、敗北の原因は他の労働者諸党が闘争に参加しなかったのみならず、ブルジョワジーの手先となって闘争をボイコットし弾圧したことになるのだと強調した。1921年夏（6月22日から7月12日）のコミンテルン第三回大会では「3月行動」の敗北をめぐって激しい論議がおこなわれた。ルカーチは、この大会にハンガリー共産党代表団の一員として参加した。ルカーチは、1919年のハンガリー・評議会（タナーチ）共和国崩壊後、ウィーンで発行されていたコミンテルン東南ヨーロッパ支部の機関誌『コムニスムス』の共同編集者でもあった。レーニン、トロツキーをはじめとするロシア代表は、闘争の一揆主義的性格を厳しく批判し、ドイツ共産党執行部（左派が主流）は、それに抵抗した。「攻勢戦術」は、「3月行動」の敗北を境にコミンテルン第三回大会において公式に否定され、「大衆のなかへ」のスローガンのもとに新たに統一戦線が採択されると共に、「攻勢戦術」の支柱であった『コムニスムス』も1921年9月を最後に廃刊となった。パウル・レヴィは、除名の処分になった。また、ハンガリー共産党内部においても、ベーラ・クンが関わった「3月行動」の評価をめぐって複雑な形で表面化した。イェーネ・ランドレルを中心とする党中央委員会多数派は、コミンテルン代表者としては少数派であり、「ランドレル・フラクション」を形成して、ベーラ・クンらの党内少数派（コミンテルン代表部多数派）と対立した。コミンテルンとルカーチ、さらにはハンガリー共産党内部の対立は後々まで引き摺ることになり、さらにはこの対立が基になって1924年夏のコミンテルン第五回大会でカール・コルシュとともにルカーチは、「極左主義」として批判されることになる。

『ローテ・ファーネ』の「公開書簡」、パウル・レヴィの「われわれの道― 一揆主義に抗して」、「攻勢戦術」「3月行動にかんする指針」などについては中村丈夫編解説『マルクス主義革命論史3―第三インターとヨーロッパ革命』（紀伊国屋書店、1975年）といった包括的な研究がある。当時ロシアでは「新経済政策」（ネップ）への移行期でもあり、戦時共産主義に反対してクロンシュタットの蜂起が起こった時期でもある。イタリア社会党の内部分裂、さらにはイタリア共産党創設の時期に重なっていることに留意しなければならない。1921年、3月21日のコミンテルン執行委員会幹部会では、多数が「公開状」に対して否定的な見解を示し、翌22日の執行委員会でも、ジノヴィエフは「公開状」を非難し、ブハーリンもこれを「非革命的な行為」と評価した。これに対してラデックは、「公開状」を「現実的方策」として支持した。このような対立を察知したレーニンは、「精力的な介入を行い」ラデックに賛成して「公開状」を支持した。五十嵐仁「コミンテルン初期における統一戦線政策の形成―特にドイツ共産党との関係を中心に」『社会労働研究』第24巻（1・2号）、1978年、2-20頁参照。

コミンテルンとドイツ共産党との関連では斎藤晢「パウル・レヴィ指導下のドイツ共産党」『西洋史学』第110号、日本西洋史学会、1978年、89-107頁。同じく「コミンテルン第三回大会とドイツ共産党」『政経論叢』第47巻、（5・6号）、明治大学政治経済研究所 1979年、581-619頁。同じく「カール・ラーデーク（マ）（マ）とドイツ共産党―ＫＰＤ創設からベルリン1月闘争へ」『明治大学大学院紀要』政治経済学篇、1977年、47-59頁。上杉重二郎「ドイツにおける1921年3月行動」『現代と思想』第23号、青木書店142-167頁、1976年。

ローザ・ルクセンブルクの研究動向については西川正雄「ローザ・ルクセンブルク解釈の流れ」『歴史学研究』歴史学研究会編集、第239号、1960年、青木書店、45-53頁。同じく「ローザ・ルクセンブルク―資料と文献」『思想』559号、岩波書店、1971年、120-133頁参照。諫山正「ローザ・ルクセンブルクの『ロシア革命論』の思想的背景」『唯物史観』第8号、河出書房新社、1970年、58-68頁。

レーニンが提唱した「コミンテルンの加入条

件」（1920年8月6日）については村田陽一編訳『コミンテルン資料集―1918-1921』第一巻、1978年、214-218頁。第12条には「民主主義的中央集権制」（傍点原文）があることに留意。ドイツ共産党のコミンテルン加入については、ローザの意思ではないと、H・エーベルラインが反対している。ローザをコミンテルンやマルクス＝レーニン主義の系譜として捉えるのは誤りである。ボルシェヴィズムが何故、スターリン主義に陥っていったかといった問題も「コミンテルンの加入条件」と無関係ではない。各国社会主義政党はコミンテルン加入に対して躊躇していた。ドイツ共産党が創設される過程には「スパルタクス団」のみならず、「ブレーメン左派」、「革命的オプロイテ」がある。また、ドイツ共産党がコミンテルン＝スターリン主義に服従する過程についてはOssip K. Flechtheim, *Die KPD in der Weimarer Republik*, Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt am Main, 1969.（O.K.フレヒトハイム, H.ウェーバー『ワイマル共和国期のドイツ共産党［追補新版］』高田爾郎訳、ぺりかん社、1980年）（『ヴァイマル共和国時代のドイツ共産党』足利末男訳、東邦出版、1972年）を定評があり、最も包括的な研究としてあげることができる。斎藤哲「ヴァイマル時代末期（1929～32/33）のドイツ共産党―研究史素描」『明治大学社会科学研究所紀要』第25巻第2号、明治大学社会科学研究所、1987年、127-144頁参照。尚、コミンテルンの成立などについては、例えば、中林賢二郎「コミンテルンの成立―初期コミンテルン史をめぐって」『国際労働運動の歴史と現状』所収、労働運動史研究会編、労働旬報社、1970年、9-24頁も参考になる。

（28）こうした独立社会民主党と明確に分離しえなかったスパルタクス団としての組織のあり方については、後に「自然発生性論者」であり、党の役割を過小評価したというローザ解釈を生む要因になっている。ドイツ共産党がドイツ社会民主党に敗北した原因のひとつとして「ドイツ社会化運動」が挙げられる。「ドイツ社会化運動」とは、第一次世界大戦の敗北と11月革命の危機的情況に対応して、全ての階級・党派が自己のドイツ資本主義の根本問題をめぐって展開した運動である。資本主義から社会主義への過渡期が到来し、この時期の「社会化」（Sozialisierung）とはこれまでとは全く異なった意味をもって登場した。すなわち、「社会的になる」という意味ではなくて、「社会主義化する」ということを意味していた。すなわち、「生産手段の社会化（Vergesellschaftung）」である。ワイマール期ドイツ資本主義、さらには現代資本主義の諸問題の解明にとって極めて興味ある内容を提示している。社会民主主義者の社会化構想こそは、社会化運動において提示された種々の社会化構想の中心に位置するものである。「社会化委員会」のメンバーにはカウツキーや、ヒルファディング、シュムペーターやレーデラーらの顔ぶれもみられる。とりわけ、ヒルファデングについては、ワイマール共和国時代の蔵相を務めたことを見落としてはならない。その他では、カール・コルシュは「社会化論」についての論考を多数残している。また、ドイツ社会政策学会の雑誌『社会科学および社会政策アルヒーフ』に社会民主党に関するR.ブランクの論文「ドイツ社会民主党支持者の社会的構成」が掲載されている。例えば、牧野雅彦「マックス・ウェーバーと社会民主党」『名古屋大学　法政論集』第102号、1984年、112-165頁参照。差し当たり、上条勇「ドイツ革命初期の社会化論争」『労働運動と経済民主主義（労働運動史研究）』第63号、1980年、労働旬報社、122-145頁参照。

（29）R. Luxemburg, *GW*, Bd.4, Dietz Verlag, Berlin, 1974, S.333f.（伊藤成彦・丸山敬一訳『ロシア革命論』論創社、1985年、5頁）Vgl.P.Levi（hrsg.）*Die Russische Revolution*, a.a.O., S.70.西川正雄は次のように述べている。「ルクセンブルクは、11月革命を第一期と呼んだし、11月革命に高い評価を与えもしたが、しかし第二期ということばはどこにもないし、11月蜂起を社会主義革命と規定してはいない。むしろ彼女は、ブルジョワ革命とプロレタリア革命とを一つの連続としたものとして見たと思われる」。西川正雄「ローザ・ルクセンブルクとドイツの政治」『史学雑誌』第69編第2号、東京大学文学部・史学会、1-46頁。引用箇所19頁。

（30）ルカーチによれば、農業問題は、「ボルシェヴィキの農業形態が社会主義的な、少なくとも社会主義に向かう方策であったかどうかではなくて、昂揚しつつある革命運動が決定的な点を目指していた当時の状勢のなかで、解体しつつ

あるブルジョワ社会のあらゆる本源的な諸力が、反革命を組織するブルジョワジーに反対して結集するか否かにある」。G.Lukács, *GuK*, a.a.O., S.424.（448頁）また、民族性の問題については、「なんら存在しないような来るべき社会主義の状態を思想的・空想的に先取りすることによるのではない、それはただ、抑圧民族のプロレタリアートが勝利して、『国家の解消をも含めて』完全な自決権という究極の結果を獲得し、圧迫する帝国主義の傾向と実践的にはっきりと手を切ることによってである」。Ebd., S.427.（452頁）

（31）R. Luxemburg, *GW*, Bd.4, a.a.O., S.360.（伊藤成彦・丸山敬一訳『ロシア革命論』前掲、42頁）Vgl. P.Levi（hrsg.）, *Die Russische Revolution*, a.a.O., S.110f.

（32）R. Luxemburg, *GW*, Bd.4, a.a.O., S.359.（41頁）尚、ルカーチが使用しているパウル・レヴィ版ではFreiheit ist immer Freiheit des anders Denkenden となっている。Vgl. G.Lukács, *GuK*, a.a.O., S.447.（473頁）Vgl. *Die Russische Revolution*, a.a.O., S.109.（伊藤成彦・丸山敬一訳『ロシア革命論』前掲、41頁）

（33）Vgl. G.Lukács, “Kritische Bemerkungen zu Rosa Luxembergs ‘Kritik der russischen Revolution’ ”, in *Die Internationale : Zeitschrift für Praxis und Theorie des Marxismus*, Jahrg.4.H.8. Vereinigung Internation, Verlags-Anstalten, Berlin, 1922, S.186. この辺りの事情については富永幸生「ローザ・ルクセンブルクのロシア革命論をめぐって」『独ソ関係の史的分析1917-1925』岩波書店、1979年、154－216頁が詳しい。同じく「ドイツ共産党創立大会―『大会議事録』を中心に」『現代史研究』第24号、現代史研究会、12－61頁参照。 尚、ルカーチは、「マルクス主義者としてのローザ・ルクセンブルク」に関しては一語たりとも撤回する必要はないと「脚注」で断っている。

（34）G.Lukács, *GuK*, a.a.O., S.423.（447頁）

（35）R. Luxemburg, *GW*, Bd.4, a.a.O., S.360.（42頁）Vgl. P.Levi（hrsg.）, *Die Russische Revolution*,a.a.O., S.110. Vgl.G.Lukács, *GuK*, a.a.O., S.430.（455頁）

（36）Ebd., S.439.（465頁）

（37）Ebd.

（38）Ebd., S.463.（494頁）

（39）Ebd.

（40）Ebd., S.425.（449-450頁）

（41）Ebd., S.425.（450頁）

（42）Ebd., S.434.（460頁）

（43）Ebd., S.438.（464頁）

（44）Ebd., S.167.（156頁）

（45）Ebd., 168f.（156-7頁）

（46）Ebd., S.497.（533頁）

（47）B. Spinoza, *Sämtliche Werke: Abhandlung von Gott, dem Menschen und seinem Glück ; Ethik*, Bd. I. C.Gebhardt（hrsg.）Verlag von Felix Meiner, Leipzig, 1922, S.176.（『エチカ』（下）第四部、畠中尚志訳、岩波文庫、1989年、14頁）ラテン語との照応については、*Spinoza Opera*.（Ⅰ－Ⅲ）C.Gebhardt（hrsg.）, C. Winter, Heidelberg, 1972を使用した。以下、Cf. *Spinoza Opera*, Ⅱ. p.210のように記す。

スピノザの政治思想については、柴田寿子『スピノザの政治思想―デモクラシーのもうひとつの可能性』未来社、2000年。鷲田小彌太「スピノザの大衆国家論」『人間社会の論理―ホッブス、スピノザ、マルクス、ルカーチ』所収、青弓社、1985年、65-110頁参照。内田弘「スピノザの大衆像とマルクス―『神学・政治論』抜粋ノートの問題像」『専修経済学論集』第34巻、第3号2000年、専修大学経済学会、285-316頁。同じく「質料因根源論としての『マテリアリスムス』―マルクス『フォイエルバッハ・テーゼ』再読」『情況』第三期、第10巻第5号、2009年、72-84頁参照。尚、現代思想との関連では、遠藤孝「『構成する権力』と『主権権力』―権力をめぐるネグリとアガンベンの論争」『法学新報』第117巻、第1・2号中央大学法学会、99-127頁は、生権力および生政治と構成的権力との関係を緻密に整理している。その他、ジョン・ホロウェイ『権力を取らずに世界を変える』大窪一志・四茂野修訳、同時代社、2009年参照。『歴史と階級意識』がネグリに与えたインパクトについては、中村勝己「解説 70年代イタリアにおける後期マルクス主義の成立」『戦略の工場―レーニンを超えるレーニン』所収、作品社、2011年、515-541頁、とくに521頁。市田良彦「解説 歴史のなかの『レーニン講義』、あるいは疎外なきルカーチ」『戦略の工場』前掲所収、500-514頁参照。

（48）B. Spinoza, *Sämtliche Werke: Theologisch-*

Politischer Traktat, Bd. Ⅱ. C.Gebhardt（hrsg.）Verlag von Felix Meiner, Leipzig, 1921, S.279f.（『神学・政治論』（下巻）一六章、畠中尚志訳、岩波文庫、1954年、173頁）Cf. *Spinoza Opera*, Ⅲ. p.193.

（49）B. Spinoza, *Sämtliche Werke: Abhandlung vom Staate*, Bd. Ⅱ. a.a.O., S.71.（『国家論』三章二節、畠中尚志訳、岩波文庫、1976年、35-6頁）Cf. *Spinoza Opera*, Ⅲ. p.284f.

（50）Ebd.,S.76.（『国家論』前掲、三章九節、42頁）Cf. *Spinoza Opera*, Ⅲ. p.288.

（51）B. S*pinoza, Sämtliche Werke: Briefwechsel*, Bd.Ⅲ. C.Gebhardt（hrsg.）Verlag von Felix Meiner, Leipzig,1914,S.210.（畠中尚志訳『スピノザ往復書簡集』五〇、岩波書店、1967年、238-9頁）Cf. *Spinoza Opera*, Ⅳ, p.240.

（52）A.Negri, *Le pouvoir constituant : essai sur les alternatives de la modernité*, traduit de l'italien par É. Balibar et F.Matheron, Presses Universitaires de France, Paris,1997,p.387.（杉村昌昭・斉藤悦則訳『構成的権力―近代のオルタナティブ』松籟社、1999年、398頁）

（53）Ibid., p.389.（400頁）

（54）Ibid., p.390.（401頁）水嶋一憲によればスピノザは『政治論』において自然権を保持した諸個人が集合的個人または諸個人からなる一個体としての「国家＝統治権」（imperium）を創出するプロセスに着目している。スピノザはホッブスの自然状態から社会状態への移行を唱える社会契約とは異なり「群衆の力能」（multitudinis potentia）という用語が頻出することになる。

ネグリの『野生のアノマリー』がもたらした衝撃のひとつは「群衆の力能」（multitudinis potentia）に焦点を合わせた最初の哲学者としてスピノザを取り上げた点にある。そしてネグリによるインパクトを正面から受けとめたのがバリバールであった。スピノザの政治＝哲学が帯びている重要性は、ただ単にスピノザが「群衆」に対して国家における立憲的＝構成的機能を与えているということに起因するものではなく、様々な「群衆の運動」にまつわる両価性を彼が歴史のただなかで探査しているということに起因するのである。水嶋一憲「マルチチュードの力能と恐れ」『スピノザと政治』所収、水声社、2011年、259－276頁参照。バリバールとスピノザとの関係は、太田悠介「『大衆の恐怖』の擁護のために―エティエンヌ・バリバールの政治哲学におけるスピノザの契機」『言語・地域文化研究』第16号、東京外国語大学大学院、2010年、233－255頁参照。その他では『現代思想　総特集スピノザ』11月臨時増刊、1996年参照。

（55）G.Lukács, *GuK*, a.a.O., S.464.（495頁）

（56）Ebd.

（57）Ebd., S.114.（91頁）

（58）Ebd., S.114.（92頁）

（59）Ebd., S.465.（496-7頁）

（60）G.Lukács, “Spontaneität der Massen, Aktivität der Partei”, in *Die Internationale-Zeitschrift für Praxis und Theorie des Marxismus*, Jahrg. 3., H.6. Frankes Verlag G.m.b.H., Leipzig-Berlin, 1921, S.208-215.（池田浩士編訳『ルカーチ初期著作集3』所収、前掲、237-248頁）引用箇所はVgl.S.213f.（245頁）池田浩士『ルカーチとこの時代』インパクト出版会、2009年、328頁以下参照。

（61）G.Lukács, “Vor dem dritten Kongreß”, in *Kommunismus : Zeitschrift der Kommunistischen Internationale für die Länder Südosteuropas*, Jahrg. 2. H.17/18, Wien, 15.Mai, Wien,［Feltrinelli Reprint, Milano］, 1921, S.583-592.（池田浩士編訳『ルカーチ初期著作集3』所収、前掲、249-262頁）引用箇所はVgl.S.588.（256頁）

（62）G.Lukács, *GuK*, a.a.O., S.473.（506頁）

（63）国家権力の死滅は哲学用語では「限定された否定」（die bestimmte Negation）を意味する。より正確にいえば、構成された権力への構成的権力の「限定的否定」を意味するものである。ドイツ革命の只中で『暴力批判論』（1921）を書いたヴァルター・ベンヤミンの次の記述は示唆的な回答を与えてくれる。「階級意識をもつプロレタリアートが一枚岩に見えるのは、外側からにすぎない。つまり、抑圧者たちの想像のなかでのことにすぎない。プロレタリアートが解放闘争に踏み出す時点では、外見的に一枚岩に見える大衆は、真実にはすでにほぐれた構造をもっている。行動へ移行する大衆は、単なる反作用（リアクション）の支配下には、もういない。ほぐれたプロレタリア大衆（Auflockerung der proletarischen Massen）こそが、連帯する。プロレタリア階級闘争の発揮する連帯性においては、個人と大衆との間の死んだ対立、非弁証法的な対立は、

廃棄されているのだ。同志にとって、そのような対立はない。したがって、革命の指導者にとって大衆が決定的なものだとしても、革命の指導者の最大の業績は、大衆を自分の方へ引き寄せることではなくて、自分の方がくりかえし大衆の一員になること、くりかえし大衆のために、数十万のうちの一人となることである。……真に歴史的な過程の独自性は、一枚岩だった大衆のリアクションが、それ自体の内部に動揺を呼びさまし、この動揺が大衆をほぐれさせて、ほぐれたかれら自身が階級意識をもつ中心メンバーたちの集合であることを、かれらに気づかせることである」。W. Benjamin, “Das Kunstwerk im Zeitalter seiner technischen Reproduzierbarkeit（Zweite Fassung）”, in *Gesammelte Schriften*,（Ⅶ.Ⅰ）R.Tiedemann & H. Schweppenhäuser（hrsg.）, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1989, S.370f.（野村修訳『ボードレール他五篇　ベンヤミンの仕事2』所収、岩波文庫、1994年、116-118頁）

(64)「神的暴力」とはベンヤミンが、カール・シュミットの影響を受けて考案された概念である。ベンヤミンは、法の内部において成立する「法措定―法維持暴力」を「神話的暴力」と規定した上で、「神話的暴力」の停止を命じる純粋に直接的な暴力を「神的暴力」と呼んでいる。プロレタリアートの暴力の噴出した瞬間に法措定と法維持の暴力が停止され、様々な権力や支配の暴力が最終的に廃絶される。いわば、「運命」と「罪連関」からの救済（エアレーズング）＝解放である。ベンヤミンが中部ドイツにおける「3月行動」直前の（1921年1月）に「暴力批判論」を執筆していることに留意したい。論考自体は同年8月に『社会科学・社会政策アルヒーフ』に発表された。Vgl.W.Bemjamin, “Zur Kritik der Gewalt”, in *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, Bd.47. J.C.B. Mohr（Paul Siebeck）, Tübingen, 1920/1921, S.809-832.ベンヤミンの『暴力批判論』をめぐる解釈についてはJ.Derrida, *Force de loi : le “fondement mystique de l’autorité”, Galilée,* Paris,1994.（堅田研一訳『法の力』法政大学出版局、2011年）が定評があり、有益である。尚、市野川容孝は、野村修『暴力と反権力の論理』（せりか書房、1969年）の見解を踏まえて、ベンヤミンの『暴力批判論』をローザへの追悼論文として意義付けしているが、ベンヤミンの「暴力批判論」も、ルカーチの「階級意識論」と同じくベンヤミン自身の「構成的権力論」として読まなければならない。市野川容孝「暴力批判試論―R.ルクセンブルクとW. ベンヤミン」『現代思想』11月号、青土社、2005年、216-237頁。

(65) アーレントは『革命について』で次のようにいっている。「ハンガリーの場合あらゆる居住地域に出現した地域的な評議会、街頭における共同の闘争のなかから成長してきたいわゆる革命評議会、ブダペストのカフェで生まれた作家や芸術家の評議会、大学における学生・青年評議会、工場の労働者評議会、軍隊の評議会、公務員の評議会等々があった。このような雑多な集団にそれぞれ評議会がつくられた結果、多かれ少なかれ偶然的であった近接関係は、一つの政治制度にかわった。この自発的な発展のなかでおどろくべき局面は、この二つの例において、ロシアの場合は数週間、ハンガリーの場合は数日もするとこれらのいちじるしく雑多な機関が、地域的・地方的性格の上級評議会を形成しつつ、協力と統合の過程を促進しはじめ、ついにはこれらの地域的・地方的性格の上級評議会から全国を代表する会議の代議員を選挙するまでになったということである」。H.Arendt, *On Revolution*, Penguin Books, Harmondsworth, 1984, pp.266f.（志水速雄訳『革命について』ちくま学芸文庫、2005年、423-424頁）

その他、ドイツ革命について、とくにドイツ革命とドイツ共産党、ドイツ社会民主党、コミンテルンとの関連を考察する場合、有益な資料・文献を挙げておく。

The Communist international, 1919-1943 : documents, Vol.Ⅰ-Ⅲ.selected and edited by Jane Degras Frank Cass, London, 1971.（荒畑寒村・大倉旭・救仁郷繁ほか訳『コミンテルン・ドキュメント』（1-3）現代思潮社、1969-1972年）

村田陽一編訳『コミンテルン資料集―1918-1921』第一巻、大月書店、1978年。

ソ連邦共産党中央委員会付属マルクス＝レーニン主義研究所編『コミンテルンの歴史』上巻、村田陽一訳、大月書店、1979年。

山本統敏編・解説『マルクス主義革命論史2―第二インターの革命論争』紀伊国屋書店、1975年。

中村丈夫編・解説『マルクス主義革命論史3―第三インターとヨーロッパ革命』紀伊国屋書店、

1975年。
野村修編訳『ドキュメント現代史2―ドイツ革命』平凡社、1972年。
加藤哲郎『コミンテルンの世界像―世界政党の政治学的研究』青木書店、1991年。
H.Weber (hrsg.), *Der deutsche Kommunismus : Dokumente 1915-1945*, Kiepenheuer & Witsch, Köln, 1973.
H.Weber, *Die Wandlung des deutschen Kommunismus : die Stalinisierung der KPD in der Weimarer Republik*, Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt am Main, 1969.
O.K. Flechtheim, *Die KPD in der Weimarer Republik*, Europäische Verlagsanstalt, Frankfurt am Main, 1969.（O.K.フレヒトハイム、H.ウェーバー『ワイマル共和国期のドイツ共産党[追補新版]』高田爾郎訳、ぺりかん社、1980年）（『ヴァイマル共和国時代のドイツ共産党』足利末男訳、東邦出版、1972年）
H. Duhnke, *Die KPD von 1933 bis 1945*, Kiepenheuer & Witsch, Köln, 1972.（『ドイツ共産党―1933-45年』（上下）救仁郷繁訳、ぺりかん社、1974-75年）
W. Abendroth, *Aufstieg und Krise der deutschen Sozialdemokratie : das Problem der Zweckentfremdung einer politischen Partei durch die Anpassungstendenz von Institutionen an vorgegebene Machtverhältnisse,* Stimme-Verlag, Frankfurt am Main, 1964.（広田司朗・山口和男訳『ドイツ社会民主党小史―その変質過程』、ミネルヴァ書房、1969年）
E.Matthias,“Kautsky und der Kautskyanismus-Die Funktion der Ideologiein der deutschen Sozialdemokratie vor dem ersten Weltkriege”, in *Marxismusstudien*, I.Fetscher (hrsg.), Mohr, Tübinge, 1957, S.151-197.（E・マティアス『なぜヒトラーを阻止できなかったか―社会民主党の政治行動とイデオロギー』安世舟・山田徹訳、岩波現代選書、1984年）
林健太郎『ワイマール共和国―ヒトラーを出現させたもの』中公新書、1963年。
篠原一『ドイツ革命史序説―革命におけるエリートと大衆』岩波書店、1973年。
篠塚敏生『ドイツ革命の研究』多賀出版、1984年。
篠塚敏生『ヴァイマル共和国初期のドイツ共産党―中部ドイツでの1921年「3月行動」の研究』多賀出版、2008年。
山田徹『ヴァイマル共和国初期のドイツ共産党』御茶の水書房、1997年。
猪木正道『ドイツ共産党史―西欧共産主義の運命』弘文堂、1950年。
安世舟『ドイツ社会民主党史序説―創立からワイマール共和国成立期まで』御茶の水書房、1973年。
山本佐門『ドイツ社会民主党とカウツキー』北海道大学図書刊行会、1981年。
小林勝『ドイツ社会民主党の社会化論』御茶の水書房、2008年。